

行った。

II. 方法 調査対象は平成7年5月から平成11年11月までにわれわれに受診した要介護高齢者123名（平均年齢74.6±11歳）であり、各々について診療場所、診療内容、処置回数、および患者の有する主たる基礎疾患を分析し、訪問歯科診療における留意点に関する検討を加えた。

III. 結果と考察 処置内容に関して、歯の欠損に伴う有床義歯補綴に関する処置が全体の約83%を占め、その内訳は、「義歯の修理およびリライニング」が56%、その平均診療回数は1.5回であり、「新義歯製作・装着」が38%、その平均診療回数は4.6回であった。診療場所としては、「患者の自宅」が59%、「本学歯学部附属病院」が8%、「患者の入院中の医科病院」が41%であった。なお、「新義歯装着後あるいは旧義歯の修理、リライニング後の義

歯調整」の平均回数は3.3回であった。また、基礎疾患（1人につき2疾患を上限）としては、脳血管系疾患が68症例、循環器系疾患が25症例であり、両者を合わせると93症例であり、全体の76%を占めていた。以上のことから訪問歯科診療においては、有床義歯補綴が主体であり、平均診療回数は通常の外来診療のそれと同程度であることが判明し、訪問診療であっても通常の術式での診療が可能であることが示された。また、在宅要介護高齢者においては、急激な循環動態の変動が重篤な合併症を引き起こす可能性がある脳血管系疾患と循環器系疾患が基礎疾患全体の76%を占めており、診療時には患者監視装置などによるモニタリングを行い、安全性の確保を図る必要性が示唆された。

21. 歯科衛生士専門学校におけるホームルーム活動の有効活用について

○長田 真美, 沢辺千恵子, 大山 静江,
岡橋 智恵, 小田島千郁子, 五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校)

歯科衛生士教育では、知識・技術・態度の統合を目指した教育活動の展開が望まれている。

しかし、実際の教育現場のなかでは、今日の学生を取り巻く生活環境や意識の変化も相まって、人間関係の稀薄さや規範意識の低下から、従来の指導法では通用しがたい場面が見られる。

そこで、本校では毎朝I講時目が開始される前の5分間をホームルームとし、学生集団であるクラスのより良い風土づくりの時間として活用したところ、良い結果を得たので報告する。

対象及び方法 歯科衛生士に必要な職業人としての意識づけ、さらに医療人としての資質の向上を図るために日常の身近な話題を選択して、繰り返し学生にアピール

する方法をとった。評価尺度には、ユーザーである学生のレポート（「医療人に必要な態度について」）を用いた。

結果 レポートにみられるいくつかのキーワードをカテゴリ分類して集計したところ「態度」に関しての友人の影響が大きく、集団を構成する学生の個々の考え方や行動が学級全体に影響を及ぼし、人間関係の形成に大きな役割を果たしていることが分かった。さらに、学級集団には、学生のやる気を引き出し、学習や社会性を促す機能のあることが推察された。また、望ましい学級風土を形成するためには、学生一人ひとりの行動や心情を深く理解し、受容的かつ共感的な雰囲気づくりが必要であり、それを教員が支援するのが望ましいと思われた。

22. 臨床実習における看護婦のかかわり

—歯学部附属病院の特徴を活かし魅力ある臨床実習を行うために—

○小野 政子, 畑 了子, 堀 富江*
(北海道医療大学歯学部附属病院看護部・
北海道医療大学医科歯科クリニック看護部長* (前北海道医療大学歯学部附属病院看護部長))

《はじめに》今年度の臨床実習では、歯科衛生士専門学校より、学生の個人評価表という新しい試みが提案され

た。そこで、私達看護婦も、学生の個性を細やかに評価できる実習方法の検討を行い、実施してみた。